高校日本史で戦争をどう教えるか　～民衆の戦争体験を読み直す～

柏陽高校　**矢野　慎一**

はじめに

今から70余年前にあった戦争は、現代日本の学校ではどのように教えられているのだろうか。かつて、1970年代に全国で空襲記録運動が大きく盛り上がった時、その運動を支えたのは教師たちだった。彼らが運動に参加した動機は、戦争を知らない世代が増えつづける時代状況の中で、戦争の記憶が社会全体から薄れていってしまうことに危機感を覚えたからである。しかしその当時、戦争を教える教師たちは自らも戦争体験者であった。直接の戦場体験をもつ者から学徒勤労動員の体験者、学童疎開の体験者、本土空襲の体験者までいくつかの世代にまたがって戦争体験をもつ人びとが教室にはいた。そこで彼らが教えてきたことが、現代日本社会の根強い反戦思想や非軍事的な世論が形成される上で、非常に大きな役割を果たしたと評価することができる。

ところが現代の学校現場ではどうであろうか。あたりまえのことだが、教室で戦争を教える教師も、戦争を学ぶ児童・生徒も等しく戦争を知らない世代である。彼らが近代日本の戦争を教え学ぶ機会は、小学校では国語と社会、中学校では社会の歴史分野、高校では日本史だけである。そこでは教科書の叙述や教材を通して戦争を学ぶのだが、はたして教科書だけで戦争を学ぶことができるのだろうか。本稿では、歴史教育の現場で戦争を教え学ぶことの課題と可能性について論じたいと思う。

教科書で戦争はどのように叙述されてきたか

戦後日本の高校日本史教科書で、戦争はどのように叙述されてきたのだろうか。ここでは、1970年代と現代の教科書との比較を行って、およその傾向を探ってみたい。

家永三郎『新日本史　三訂版』（三省堂、1971年）では、昭和史論争を踏まえた戦争叙述がなされてる。昭和史論争とは、遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史』（岩波新書、1955年）の内容をめぐっておこなわれた論争で、亀井勝一郎らから戦争に翻弄された人びとの姿が描かれていないとの批判があり、これを中心に歴史学者や文学者、評論家の間で議論の応酬があった。家永の教科書はその論争を意識して、当時の一般民衆が戦争とどう関わったのかを描き出そうと試みている。

現代の日本史教科書で、笹山晴生ほか『詳説日本史B』（山川出版社、2015年）は、現在最もオーソドックスな教科書という評価が定着しているが、それでも中国や東南アジアでの日本軍による加害についての記述が見られるなど、従来との違いは明らかである。だがやはり、日米交渉の経過を通じて戦争がどうして始まったのか、どのようにして戦争は終わったのかといった政治史的な内容が叙述の中心であることに変わりはない。

これに対し成田龍一ほか『新日本史A　新訂版』（実教出版、2018年）は、アジア太平洋戦争の叙述にかなり多くのページを割いている。従来の教科書では、アメリカとの戦争を中心に叙述される傾向があったのに対し、戦争がアジア全域にまたがっていてイギリスやオーストラリア、そして中国との戦争でもあったことが強調されている。また、アジア太平洋戦争開戦以降の中国戦線の状況も、日本軍の加害を中心に記述されている。根こそぎ動員された人びとのことや、戦争に抵抗した人びとについて目配りしていることも特筆に値する。全体として植民地や女性、復員や引き揚げによる人の移動、

焼け跡・闇市などといった歴史学の最新の研究動向に即した叙述が行われている。おそらく戦争叙述に関して、現時点で最も充実した内容を備えている教科書だろう。

以上の点から、日本史教科書の日中戦争やアジア太平洋戦争の記述は大きく変化してきていることがわかる。しかしながら、戦争を教えるのに教科書にのみ頼るだけでは不十分であり、教師自身によるさらなる教材開発が必要となるだろう。それではそのために、どのような資料を活用することができるのだろう。

戦争記録運動と歴史教育の連携の可能性を探る

結論から言うと、戦争記録運動の成果に歴史教育がもっと学ぶべきであるということである。そこで、以下において、現在の戦争記録運動の到達点を明らかにすることで、歴史教育の現場における戦争記録運動との連携の可能性を示したい。

戦争記録運動とは、日本国内の戦争をめぐるさまざまな事象を記録して、社会に発信し、そして継承することを目的とする運動のことである。もちろんそれぞれの運動は多様であり地域性も強いが、本稿では神奈川の「空襲」(米軍資料を含む)と「銃後の生活」を記録する運動に限定して議論したい。

日本における本格的な戦争記録運動のおこりは、1960 年代末から 1970 年代初頭にかけて始まった「空襲」を記録する運動である。1970 年代に各地で設立された空襲と戦災を記録する会は、約 80 団体にものぼると言われている。そうした動きの背景のひとつに、1965 年 2 月から始まった「北爆」がある。ちょうど日本でもテレビが各家庭に普及した時期で、米軍による北ベトナム空爆に関するニュースが毎日のように流された。アジア太平洋戦争の空襲体験者たちが、自らの体験を「北爆」と重ね合わせ、自らの体験を記録に残そうと考えたことから、運動が始まったのである。神奈川では横浜の空襲を記録する会が、そうした運動を牽引してきた。

ついで 1970 年代後半から 1980 年代になると、「銃後の生活」の聞き取り調査が進んだ。これは 1970 年代初頭からの民衆レベルでの沖縄戦の聞き取りに触発された動きでもあり、銃後に暮らした庶民にとっての戦争を記録する運動である。具体的には、戦時下の学校生活や学徒勤労動員の体験、そして集団学童疎開の体験などである。こうした考え方は、神奈川では戦時下の小田原地方を記録する会の活動に大きな影響を与えている。

2000 年代には、すでに 1970 年代の空襲記録運動の中でも部分的に紹介されていた、「米軍資料」の本格的な活用が始まる。米軍資料とは、主に米国立公文書館が情報公開制度に基づいて提供する、米国政府や米軍の公文書のことである。横浜の空襲を記録する会編『横浜の空襲と戦災』第四巻「外国資料編」(1977 年)では、米軍の戦略爆撃調査団の報告書が紹介されているが、すでに空襲ごとの作戦任務報告書にも注意が向けられている。しかしこの頃は、まだ部分的な紹介に限られていたのが、1990 年代以降になるとより大規模に翻訳され、出版が行われるようになってきた。

組織的な米軍資料の調査・研究については、2000 年 7 月に第 1 回米軍資料の調査・活用に関する研究会(略称:米軍資料研究会)が開催され、以後空襲・戦災を記録する会全国連絡会議の大会に合わせて開かれている。米軍資料研究の意義は、それまで空襲と戦災の記録運動で重視されてきた体験者からの聞き取りや戦災遺構の調査に、米軍側の情報を加味することで、空襲を多角的・客観的に理解することができるようになったことである。

次に神奈川の主要な運動団体を紹介しよう。

●横浜の空襲を記録する会

記録する会は、1971年7月に発足した全国でも最も歴史のある運動団体の一つである。会結成の目的は、横浜大空襲をはじめとする横浜のいくつかの空襲被害や人びとの空襲体験を記録するとともに、敗戦後の米軍占領下の横浜を記録することである。活動として1970年代には資料展、空襲展や講座、シンポジウムなどを盛んに展開した。そこで多くの証言や手記、戦災資料が集められた。それらをもとに1975～1977年には横浜市の委託により『横浜の戦災と空襲』（全6巻）が編集・発行された。構成は、体験記編、市民生活編、公式記録編、外国資料編、接収・復興編、世相編から成り、現在も空襲研究の基本文献とされている。会の活動の中心となったのは、横浜市立大学名誉教授今井清一であり、現在も活躍している。

会が収集した資料は横浜市史資料室に収蔵され、現在、会の活動目標は、横浜市に対して収蔵された資料の市民への公開を行うための「空襲・戦災資料館」の設立を求める方向へと進んでいる。会では現在も毎年5月29日に、横浜大空襲祈念の集いを開催し、空襲体験者の証言を聞いたり、空襲を題材とする合唱曲や吹奏楽の演奏などが行われている。

●戦時下の小田原地方を記録する会

記録する会は、1979年に小中学校の教員を中心とするメンバーによって発足した。これは、東京空襲を記録する会や横浜の空襲を記録する会などの活動に触発され、地域の空襲や戦時下の暮らしなどについて、聞きとりという手法にこだわって活動を続けている。これまで聞きとってきた戦争体験として、空襲・学徒勤労動員・学童疎開・傷痍軍人・本土決戦・箱根と戦争・敵国人抑留・ドイツ海軍の兵士たちなどがある。そうした証言や調査結果は、会誌『戦争と民衆』に掲載され、それをもとに多くの出版物が刊行されている。記録する会は、小田原地方という地域に根付いた地道な活動を続けているのである。

●平塚空襲を記録する会

記録する会は、1989年に平塚市博物館の企画事業のひとつとして始まった。会の活動は、①戦時下の平塚と平塚空襲に関する資料の収集、②戦争及び空襲体験を中心とした聞き取り調査、③市内戦災地図の作成、④空襲による犠牲者の検証などである。会員は空襲を体験した平塚市民を中心に構成されている。

そうした活動の成果は、1995年の平塚市博物館特別展『44万7,716本の軌跡～平塚の空襲と戦災』で発表されている。その後も、『市民が探る平塚空襲』証言編（1998年）、資料編（1～3）（2003年、2004年、2006年）が出版され、さらに1988年から始まる証言集『炎の証言』は現在16号まで発行されている。現在神奈川県内で、最も活発な活動を続けている団体である。

●神奈川の学徒勤労動員を記録する会

記録する会は、1995年に学徒勤労動員体験者と高校教員とによって設立され、体験者たちからの聞き取りや史料、校史の掘り起こしを行っている。その成果は、1999年に『学徒勤労動員の記録～戦争の中の少年・少女たち』（高文研）として出版されている。

●戦時下の県立平塚高女を記録する会

記録する会は、戦時中に神奈川県立平塚高等女学校に在籍した女生徒たちによって組織された。戦時下の学校生活や学徒勤労動員、平塚空襲についての手記を集め、それに現在の神奈川県立平塚江南高等学校所蔵の資料を加え、戦時下の学校生活を明らかにし、記録として残していくことを目的としている。その成果は、1997年に『火薬廠のある街で～戦時下の県立平塚高等女学校』（夢工房）とし

て出版された。

●横浜市の学童疎開 50 周年を記念する会

記念する会は横浜市出身の学童疎開体験者によって組織され、横浜市教育委員会の委託を受け 1996 年に『横浜市の学童疎開～それは子どもたちのたたかいであった』を刊行した。本書は、第一部で学童疎開に関わる法令を収集して国家の政策としての疎開の実態を明らかにし、第二部では疎開学童の体験記が収録され、第三部では保護者や疎開学童の日記や手紙が紹介されている。

会に参加した人びとがこうした活動を始めた動機として、出版の前年が敗戦 50 年であり、ちょうど戦時中に疎開した元学童たちが 60 歳前後の年齢に達したことがあげられる。それまで戦後の経済成長を支える世代として活躍してきた元学童たちが、自らの戦争体験を振り返り、記録して後世に残したいと考えたのである。

さて以上のような戦争記録運動の成果を、日常の授業に取り込むためにはどのような点が課題になるのだろうか。

1945 年の敗戦後長い間、戦争は社会や家庭で語り継がれてきた。しかし現在は、戦争を学ぶ機会が学校教育の場に限られるようになったため、運動団体と学校との連携がますます重要となっている。たとえば小学校では、教科書を通して戦争を学ぶが、教える教師自身が戦争に対するリアリティを感じていない。そうした教師への支援において、地域の運動団体が果たす役割は大きい。さらに中学・高校では、歴史・日本史の授業において運動の成果がもっと取り込まれるべきである。神奈川での状況を先に紹介したが、最も望ましいことは教科書叙述への反映である。教科書執筆にあたる歴史学研究者が運動への理解と関心をもっと深める必要があると同時に、運動側も学問的に高い水準の成果の提供に努めなければならない。そうした場面において教師には、両者を結び付ける役割が期待される。

さらに、戦争記録運動が積み上げてきた数多くの体験記を改めて教師が読み直すことが求められる。そもそも、戦争体験者による体験記は、体験を共有する人もしくは戦争に関する知識をある程度もっている人に向けて書かれている。従って、体験記をそのまま学校現場に持ち込んでも、児童・生徒たちにはまったく理解できないだろう。まず教師自身が、体験記を読み直して戦争に対する理解を深めることが大切である。繰り返しになるが、学校現場で戦争をきちんと教えていくことは、これからますます重要になってくる。歴史教育に携わる先生方お一人お一人の研鑽を期待したい。

《参考文献》

横浜の空襲を記録する会編『横浜の空襲と戦災』全 6 巻（横浜市、1975～1977 年）。
伊豆利彦『戦時下に生きる』（有隣堂、1980 年）。
服部一馬・斉藤秀夫『占領の傷跡』（有隣堂、1983 年）。
川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた～謀略秘密基地・登戸研究所の謎を追う』（教育史料出版会、1989 年）。
赤穂高校平和ゼミナール・法政二高平和研究会編『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会、1991 年）。
戦時下の小田原地方を記録する会編『焦げたはし箱』（夢工房、1992 年）。
戦時下の小田原地方を記録する会編『撃ちぬかれた本』（夢工房、1995 年）。
今井清一『新版　大空襲 5 月 29 日』（有隣堂、1995 年）。

『写真でみる横浜大空襲～戦時下の市民生活～』(1995年)。
神奈川県歴史教育者協議会編『神奈川県の戦争遺跡』(大月書店、1996年)。
横浜市の学童疎開五十周年を記念する会編『横浜市の学童疎開～それは子どもたちのたたかいであった』(横浜市、1996年)。
神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編『神奈川の戦争と民衆』(1997年)。
戦時下の県立平塚高女を記録する会編『火薬廠のある街で～戦時下の県立平塚高等女学校』(夢工房、1997年)。
平塚の空襲と戦災を記録する会編『市民が探る平塚空襲　証言編』(平塚市博物館、1998年)。
戦時下の小田原地方を記録する会編『市民が語る小田原地方の戦争』(2000年)。
神奈川の学徒勤労動員を記録する会編『学徒勤労動員の記録～戦争の中の少年・少女たち』(高文研、1999年)。
十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』(柏書房、2002年)。
井上弘『小田原空襲』(夢工房　2002年)。
戦時下の小田原地方を記録する会編『総合で地域の戦争を調べよう』(戦争と民衆ブックレット1、2003年)。
十菱駿武・菊池実編『続・調べる戦争遺跡の事典』(柏書房、2003年)。
平塚の空襲と戦災を記録する会編『市民が探る平塚空襲　資料編（一)』(平塚市博物館、2003年)。
平塚の空襲と戦災を記録する会編『市民が探る平塚空襲　資料編（二)』(平塚市博物館、2004年)。
井上弘・矢野慎一『戦時下の箱根』(夢工房、2005年)。
戦時下の小田原地方を記録する会編『小田原地方の戦争遺跡』(戦争と民衆ブックレット2、2005年)。
戦時下の小田原地方を記録する会編『小田原と風船爆弾』(戦争と民衆ブックレット3、2006年)。
平塚の空襲と戦災を記録する会編『市民が探る平塚空襲　資料編（三)』(平塚市博物館、2006年)。
神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編『神奈川の歴史をよむ』(山川出版社、2007年)。
香川芳文『小田原地方の本土決戦』(夢工房、2008年)。
矢野慎一『日本の遺跡と遺産7　戦争遺跡』(岩崎書店、2009年)。
戦時下の小田原地方を記録する会編『戦時下の小田原地方を記録する会　30年のあゆみ』(2009年)。
戦時下の小田原地方を記録する会編『語り伝えよう小田原の戦争体験』(2012年)。
井上弘『知られざる小田原地方の戦争』(夢工房、2015年)。
平塚の空襲と戦災を記録する会編『市民が探る平塚空襲　通史編（Ⅰ)』(平塚市博物館、2015年)。
矢野慎一（文)・金斗鉉（絵)『アジア太平洋戦争』(岩崎書店、2016年)。